交差適合試験編
交差適合試験で予期せぬ反応を認めた２症例

◎富松　貴裕[1)]、立川　良昭[2)]
大分県立病院[1)]、大分赤十字病院[2)]

【はじめに】

交差適合試験は，受血者と供血者との適合性を確認する輸血前の重要な検査であり，その主な目的は、ABO 血液型の適合性を再確認すること，臨床的意義のある不規則抗体や低頻度抗原に対する抗体を検出することである．より安全な輸血のためには，あらかじめ不規則抗体 SC をおこなうことが望ましい．今回，不規則抗体 SC 陰性、交差適合試験陽性となった2 症例を経験したので報告する．

【症例】

症例１：70代・男性　貧血改善目的にて20XX年７月７日 RBC4 単位の輸血依頼があり，カラム凝集法（CAT）を用いての不規則抗体検査（IAT のみ）にて陰性，交差適合試験（PEG-IAT）にて適合確認後輸血を実施．さらに７月９日，RBC2 単位の輸血依頼があり，交差適合試験を行うと不適合（w+）となり，PEG-IAT での精査にて抗 E が検出された．７月９日不適合となった製剤の Rh 表現型は CcDEe であり，７月７日に輸血を行った２製剤は CcDEe，CCDee であった，この患者には５月23日にも輸血が行われており，その際に産生された不規則抗体が，今回の不適合製剤の輸血によって若干の抗体価上昇に伴い不適合血が検出できたものと思われる．

症例２：70代・男性　貧血改善の目的にて20XX年４月８日 RBC4 単位の輸血依頼があり，不規則抗体検査（CAT）は陰性であった．交差適合試験を実施したところ自己対照にて弱い凝集（w+）を認めた．精査として PEG-IAT での不規則抗体検査，抗体解離試験等を実施したところ，抗 Jka が検出された．事前の CAT での不規則抗体検査では，検出されなかったが，PEG-IAT での交差適合試験自己対照にて不規則抗体が検出された．患者は３月９日に RBC2 単位を輸血しており，その際に産生された抗体が輸血された赤血球に感作したものと考える．

【結語】

不規則抗体の検出感度を比較するとCAT よりも PFG-IAT の方が優れているといわれている．今回，不規則抗体検査は陰性であったが，交差適合試験を PEG-IAT にて実施することで不規則抗体を検出した症例について報告した．採用する検査法は，それぞれの検査法の特性を念頭に各施設で十分な検討の上，選択する必要性があると感じた．